

在 外 研 修 報 告

1980年8月4日から2ヶ月間にわたり、文部省の在外研修で東ドイツを中心にヨーロッパ4ヶ国を訪問することができた。研修題目はトルファン-敦煌文書の調査ということで、東ドイツ科学アカデミーの先史学研究所とフランスのパリ国立図書館とが、同文書の主たる調査機関であった。

敦煌文書の調査は隋経を中心にみせてもらい、六朝から初唐にかけての写経における書風の変化をしらべることであった。この変化を頭に入れておけば、藤原宮出土の木簡の書風のあり方を考えるときにも役だつのではないかと思って、努力してみた。この調査の結果についての簡単な報告は『文化庁月報 No. 150』に記しておいたので参照されたい。オリジナルの敦煌文書を一度に数多く見られたということだけで感激してしまったが、後からふりかえると見落した文書も数多く、その検討の仕方も不十分な点が多く気づかれ、反省させられた。写経の調査は紀年銘のあるものを選んで、その相互の書風を比較していくこととした。このように時代のことなる西域敦煌出土の写経を、直接比較しながら原本を調査できたということは、日本にはなかなかできないことなので、大変貴重な経験をさせていただいた。調査後の感想としては従来、日本の中国書道史の時代区分は、隋までを一括して南北朝の書としてあつかい、それ以後の初唐の書風とのあいだに断絶をみとめてきたが、私のつたない経験からみると隋をどちらに入れて考えるのかは微妙なところがあって、一つの過渡期としてとらえた方がよさそうに思われた。日本の書道史家の通説とちがって、隋代に書風の変化点を認める学説は藤枝晃氏の一連の論考にみられる。また、初唐の書風といっても、貞観-天宝ごろまでは階好の書が基調になっているが、咸亨年間から則天武后の時代にかけてだけは、その間、やわらかい細い筆ののびのある独特の書風が行われていて、初唐として一括して把握することができなかった。

主題である西域敦煌文書の調査以外では、専門外のことはあるが、できるだけ博物館をみであることとした。東ベルリンのペルガモン博物館はもちろん、西ベルリンのダーレムとシャルロテンブルグの博物館にも足をのぼすこととした。ダーレムの博物館には、わずかながらトルファン文書があって、収蔵庫の中で東独のアカデミーと同じようにガラス板にはさんだトルファン文書を30点ほどみせてもらった。文書はそれほど貴重品あつかいされていないのか、研究所にもあるようなやす手のキャビネットに無ぞうさにほうりこまれていた。パリでは郊外にあるサン・ジェルマン・ライエの歴史博物館が印象的で、古い城の中一ぱいに旧石器から歴史時代までぎっしり遺物がならべてあるのにはおどろかされた。この博物館については出発前、松沢亜生氏に教えていただいた。佐原真氏の話にきいていた銅包丁がたくさんあったのも、しろうと目には興味深かった。また西ベルリンでは佐原真氏の紹介で考古学研究所を訪れることができ、Dr. F. シューベルト氏に奈文研以来再会することができた。 (鬼頭 清明)